倫風宏話

学びの意欲を高めて、感謝の心を表そう

上廣哲治

古参の会友さん方といろいろな話をしていると、時に、わが会の創始者である上廣哲彦・初代会長が話題にのぼることがあります。初代会長から直接教えを受けた方の話は具体的で、語り口からは、師との思い出をいかに大切にされているかがよく伝わってまいります。同時に、往時の倫理実践に寄せた思いの熱さや、普及に対する情熱と使命感の強さも感じられました。

そのなかでも、ひときわ印象的で忘れられないのは、小さな会社を経営する傘寿を過ぎた会友さんの話です。

その方は、いかにもわが会の会友らしく、常に信用第一の経営を心がけていたそうです。小さな会社は景気の波に翻弄されやすく、決して経営は楽ではありません。ある日、得意先から受け取った小切手が不渡りになるという事故に遭いました。その金額は大きく、このままいけば月末の支払いが滞り、経営が危うくなります。知り合いを訪ねるなど金策に手をつくしましたが、うまくいきません。社長の自分はともかく、社員を路頭に迷わせるわけにはいかないと、不安と焦燥の日々を送っていました。

そのようななか、わが会の講演会の日が近づいてきました。支払期限が迫っていたので出席するか否か迷ったのですが、敬愛する会長の講演です、師の話を聞けば、解決策のヒントを学べるかもしれないと出席しました。ところが、会長の声は聞こえるのですが、肝心の内容が頭に入ってきません。支払いが気になり、上の空で集中できない。仕方がないので会長の姿を、ぼんやり見ていたそうです。

「会長先生のお顔を見ていたら不思議と不安が消え、心が落ち着いてきたんです。なぜ、そうなったのかはわかりません。敬愛する人の顔を見ているうちに不安が払拭されたのかもしれない……」

先輩会友さんはそう語りました。講演会後も経営の苦労は続きましたが、落ち着いて対応し、なんとか危機を乗り越えることができたというのです。

私たちは、なにか具体的なことを教えるのが先生であり師であると思っています。もちろん師は知識や大いなる教えを指し示してくれます。しかし、師にはそれだけにとどまらない力がある。

物理学者で随筆家の寺田寅彦は、「夏目漱石先生の追憶」というエッセイで、師としての漱石について次のように書きました。

「自分にとって先生が俳句がうまかろうが、まずかろうが、英文学に通じていようがいまいが、そんな事はどうでもよかった。（略）いろいろな不幸のために心が重くなったときに、先生に会って話をしていると心の重荷がいつのまにか軽くなっていた。不平や煩悶のために心の暗くなった時に先生と相対していると、そういう心の黒雲がきれいに吹き払われ、新しい気分で自分の仕事に全力を注ぐことができた。先生というものの存在そのものが心の糧となり医薬となるのであった」

漱石は俳句の道でも一流であったし、英文学者としても作家としても、言うまでもなく一流の人物で

す。でも、寅彦は、そうしたさまざまな業績を成し遂げた人物だから漱石を師として敬愛しているわけではない。「先生というものの存在そのものが心の糧となり医薬となる」と書いたように、漱石の人物、その存在が、ただそこにいるだけで力となり励ましとなると理解しているのです。

寺田寅彦は、熊本の旧制第五高等学校で、英語を教えていた漱石の、教え子の一人でした。先のエッセイによれば、第二学年のとき、学年試験が終わったあと、英語の点数の悪い同級生のため、「点をもらいに」漱石の家を訪れます。漱石は快く面会し、寅彦らの泣き言をだまって聞いてくれました。陳情を終えると、寅彦はその頃すでに俳人として有名であった漱石に、「俳句とはいったいどんなものですか」とたずねます。そんな不躾な質問にも漱石は丁寧に答えたのです。それ以来、寅彦は俳句の指導を受けるため、週に二、三度漱石の家に通います。この師弟関係は漱石が亡くなるまで続きました。

寅彦は、本質を突いた漱石の俳句論に心酔した以上に、いきなりの質問にも誠実に答えたその人柄、人間性に打たれたのではないでしょうか。「先生の存在そのものが心の糧」となるとはそういうことだと思うのです。企業経営者の先の先輩会友も初代会長の教えに心酔すると同時に、その人間性に打たれ、そこから学ぼうと決意したのです。ここで注意しなければならないのは、「教わろう」「教えてもらおう」と決意したのではなく、「学ぼう」と決意したという点です。私たちは学ぼうと決意し、学ぶ気になれば、さまざまなものから学ぶことができるのです。

わが会には、「宇宙に存在するありとあらゆるものが師となる」という「万象わが師」の教えがあります。この教えは、学ぶ姿勢の大切さを説くものです。優れた師に出会うためには、私たちの「学ぼう」という姿勢」が欠かせません。寺田寅彦にしても先の先輩会友にしても、学ぶ意欲があるからこそ優れた師との出会いが生まれたのです。学ぶ意欲があれば、師の教えからは当然にしても、その生き方からも、ついにはその姿からも学ぶことができるのです。

漱石門下の一人、作家の内田百閒は、漱石は「日本人の先生」、その作品は「日本人の教科書」として、師との関係を次のように書きました。

「我我が自然や人生や自分の事に就いて感じたり、考えたり、迷ったりする時、自分の内にいる夏目漱石が共に迷ったり考えたり感じたりする。指導されるとか、指図を受けるとか、そう云う事ではない。夏目漱石と云う偉大な作家がその作品を読んだ者の中に溶け込むのである」（『私の「漱石」と「龍之介」』）

漱石に師事し、その人物、作品から学ぶことを通して、師の考え方や生き方が学ぶ者のなかに「溶け込む」、つまり「自分のものとなる」、これが真の学びである、と百閒は言いたいのでしょう。

もちろん弟子に溶け込んだ「漱石」は漱石そのものではありません、弟子というフィルターを通して作られた漱石です。学ぶということは無批判に師を模倣することではなく、師の存在を身の内に感じ、その師、その教えと対話しながら自らの生き方を鍛え、自分自身をより善く作り直すことなのです。

最後に今月の実践課題です。やや先になりますが、三月二日は上廣哲彦初代会長生誕の日にあたり、被爆の身を顧みることなく、実践倫理の教えを確立し、会を創立してくださったことを感謝する、「感恩報謝の日記念朝起会」です。初代会長を顕彰し、恩に感謝することは当然ですが、それにとどまらず弟子である私たちが、いかに師から学び、いかにその教えを実践に移すかの決意を新たにする日でもあるのです。ご自身の実践が、師の願いに叶うものとなっているか、真摯に見つめ直していただきたいと思います。